実践報告㊾

済生会熊本病院における医療ソーシャルワーカーの役割

社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院
医療連携部　患者相談支援室　森冨 萌枝

病院の概要

済生会熊本病院は、熊本市の南部に位置します。熊本市内には３つの救命救急センターと大学病院があり、高度・専門医療を提供する医療機関が集積しているほか、回復期リハビリテーション病棟を有する病院も集中しています。熊本県の医療提供体制は、それぞれの急性期病院における強みの棲み分け、急性期・回復期・維持期といった地域医療全体の機能分化、病院と診療所の連携といったことにいち早く取り組んできた歴史があります。その中で当院は、高度急性期医療に特化した医療を提供しています。救命救急センター、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、災害拠点病院の機能を有し、ロボット・低侵襲血管内治療センター、集学的がん診療センターなどの診療体制によって、高い技術と高精度の医療機器による低侵襲、高価値医療の提供に邁進しています。

「済生会」の始まりは、生活苦から医療を受けることができずに困っている人たちを救済しようとする明治天皇の考えのもと1911（明治44）年に設立されました。医療や保健、福祉事業の分野の多岐にわたる活動は100年以上経った今日も全国で施薬救療の精神のもとで展開されています。そのような中で、済生会熊本病院は今年、創立88周年を迎えました。その根幹をなす“生活に困っている人を医療で助ける“という使命を果たすべく「誰一人取り残さない」医療の実現のため、高度急性期医療の提供と生活困窮者支援事業をその両輪と成し、取り組んでいます。

済生会熊本病院ヘリポートにて

病院内における相談室の位置付け

医療ソーシャルワーカー（以下、ＭＳＷ）が所属する部署には医療福祉相談室とがん総合支援室があります。医療福祉相談室は、現在、ＭＳＷ13名、事務員１名が在籍し、医療連携部に属します。主な業務は、後方連携を中心とした相談業務全般です。転退院相談、医療・福祉相談、在宅医療支援、経済的相談等の対応に加え、済生会の創立趣旨に沿った生活困窮者支援事業の総称「なでしこプラン」を組織的に実施するにあたり、立案や運営等の中心的な役割を担っています。医療連携部は、医療福祉相談室のほか、看護師による入院前支援と転退院支援を行う療養支援室、前方連携を中心としたブランディング活動、渉外業務等を行う地域医療連携室、病床調整と患者受け入れ機能強化を支援する病床管理室の４部署により体系付けられています。４部署は互いに協動しながら一体となり地域の課題に取り組みます。一方で、がん総合支援室では、ＭＳＷ２名と看護師３名、事務員１名で構成されています。組織上は、集学的がん診療センター直下の部署です。がん相談に特化した対応を中心に、診断前から終末期まで、チームで専門的に関わる体制が構築されています。治療や療養に関する相談、治療と仕事の両立支援、がんサロンの運営等のほか、地域のがん相談の窓口としての役割も有します。医療福祉相談室もがん総合支援室のいずれも、「患者さん」「医療連携」といった言葉をキーワードとし、組織貢献、強いては地域住民の安全安心な医療の提供、生活支援を実現するための活動を目指しています。

ＭＳＷへの相談の特徴と変化

ＭＳＷへの相談で最も多くを占めているのは転退院支援です。次いで経済的相談、受診受療援助、在宅療養相談の順で推移しています。経済的相談では無料低額診療事業を活用し、継続的に関わります。また、昨今は病床機能分化の促進と、医療需要の変化に伴い、救急外来からの即日転医や一般外来からの他院入院相談なども増加しています。全国的に見ても高齢化は刻一刻と進んでおり、介護ニーズの高い85歳以上の患者層が増加する社会が到来することからも、今後は益々増えていくと考えられます。

また、時代とともに家族形態や個人を取り巻く環境は大きく変化していることが言えます。本邦では、世帯規模が縮小し、単独世帯が急増しているため、人間関係の希薄化の一因になっています。身寄りのない方や社会から孤立している方が抱える課題は、医療や介護の継続が必要な状態になることで浮き彫りになります。そういった患者さんの状態が重篤な場合、その方の価値観や死生観、倫理観から、治療をどこまで希望するか事前指定の有無や代理意思決定が可能か等の確認が必要となり、複雑で多様なニーズを含みます。そして、これらの支援は手探りとならざるを得ません。こうした相談は年々増えており、社会の変化に現行の制度や仕組みが追いつかず、キーパーソンありきの事柄がまだまだ多い現状があります。

熊本市南区では「ともにメディカルサポート」という南区の医療機関、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターが定期的に課題や困りごとを共有する場が設けられています。取り組みの一つとして、身寄りなし問題についてのガイ

ドブックが作成されました。これまで手探りだったことに道標が示されたことで、困難感が少しずつ緩和されていくことが期待されます。また、当院では早くから事前指定書を活用してきました。意思表示のできる患者さんに対し、もしもの時に、その意向を汲み取った医療の提供がなされることの有用性は今後も高まっていくと考えます。短期間での、しかも病院という限られた枠での活動には限界も多く、地域を巻き込んで課題解決ができるように本当の意味での連携が重要であると考えます。今日の当院の事業目標には、病院に留まらないアウトリーチ活動の推進も掲げられており、地域とのつながりを意識した支援が求められています。

ＭＳＷの役割（社会資源の活用、関係機関との連携等を含む）

生活困窮者支援「なでしこプラン」では、組織的に様々な取り組みを行なっています。その一つが、生活支援物資の提供です。2000名を超える職員向けに支援物資を募り、外国人避難民や生活困窮者に対し、衣服や食べ物、家具、家電の提供を実施しています。当室独自で支援物資管理のためのアプリ開発を行い、物資の受け入れから提供までの管理が容易となりました。

また、無料低額診療事業では、経済的にお困りの方に対し医療の提供を行なっています。本来、慢性再来の疾患は、病院機能からも積極的に受け入れることは難しいですが、それでも経済面で適切な医療を受けられない場合は、当院で診療を行う必要があります。ここでのＭＳＷの役割は、治療と並行して患者さんとの信頼関係を築き、基盤にすることで生活状況等を把握し、患者さんの抱える課題とその背景にアプローチすることで地域の医療機関に繋いでいくことです。

最後に、後方連携業務では、入院患者の転院98%を担当しており、患者さんの早期回復や治療継続のための医療連携と病院機能の維持も含め、周辺の医療機関と協働・連携しながら地域社会全体での安定した治療継続を目指しています。

終わりに

病院機能分化が進む中で、急性期のＭＳＷは専門性の質が益々問われるようになりました。問題が複雑なほど、院内はもちろん、多くの関係機関と連携し、協働する必要があり、急性期の時間的・機能的な“縛り”のある支援では上手くいかない事を多く経験します。ソーシャルワークの場を地域に拡げ、どう関わるかがより問われています。時代の変化を的確に捉え、柔軟に、適切に、ＭＳＷができうる相談援助と地域における連携の在り方を絶えず模索していくことこそが重要だと考えます。そして自らの支援とそのプロセスにも変化をもたらせるよう取り組んでいきたいと思います。

済生会熊本病院　外観